



森林レンジャーがゆく (107)

ベニマシコ ほんぼり
紅猿子色の雪洞

彩り少ない冬の森でベニマシコ色の雪洞に出会いました。ベニマシコは、北海道などから越冬にやってくる鳥で雄は美しい紅色をしています。寒い中、枯色となった野山でベニマシコが現れるとホッコリします。雪洞の正体は、コウヤボウキ（高野箒）の冠毛（花のがくが変形したもので、種子についた綿毛のこと）です。コウヤボウキはキク科の落葉低木で、昔、高野山^{ほんまき}で箒として使われていたことからこの名が付けられました。花の終わったコウヤボウキの冠毛は枯色から紅色までグラデーションがあり、今冬は飛びきり美しい紅色に出会えたのです。花は秋に白色の筒状花^{とうじょうか}を十数個放射状に咲かせ、その形はまるで花火のようです。少しよじれた繊細な花びらは特に美しく、近くで観察する価値のある花です。林縁部や山道沿いにまとまって生育することが多いので、秋には花火がポンポンッと上がる道を、冬には雪洞が灯った道を歩いているような気分になります。

コウヤボウキは、奈良時代に蚕室^{さんしつ}を掃き清めて蚕神^{かいこがみ}を祀る儀式で子日目利箒^{ねのひのめとぎのほうき}として使われ、現在、正倉院に当時のものが納められています。枝を束ね、握り部分に紫皮を巻き、その上から金糸を巻き留め、穂先には穴を開けた色ガラスや真珠の玉を指し通して作られたという箒。玉が触れ合う音の響きで、その年の養蚕^{ようさん}の吉凶を占ったという話もあるようです。

日本は昔から養蚕が盛んで、現在でも繭玉に見立てた団子を神様に供える初午団子や、団子を枝に付ける繭玉団子などの風習が残ることからも、養蚕は地域の繁栄に大きな影響があったと分かります。あきる野でも盛んであった養蚕とコウヤボウキとのつながりを嬉しく感じながら、そろそろ芽吹くコウヤボウキを想像します。枝にポツポツ付いた小さく白い冬芽がぷっくり膨らみ始める姿…養蚕とのつながりを知った今、私には繭玉のように思えてなりません。先人の目にはどう映っていたのだろうと思いを馳せます。古今の自然や人の営みを想像しながら、今年は穏やかな春がやってくることを願うばかりです。

(加瀬澤)



美しい紅色をしたコウヤボウキの冬の姿